

りと稱すべきである。」と述べて居られるが、蓋し至言である。敢て江湖に薦むる所以である。(東方文化學院東京研究所發行。定價拾圓)〔小野〕

● Hans Baron:

Das Erwachen des Historischen Denkens im Humanismus des Quattrocento

本論はフアニスムス研究に於て令名ある Hans Baron 氏が目下準備中の Petrarca, L. Bruni und der florentiner Bürgerhumanismus des Quattrocento なるモノグラフィイ中の一章を要約して Historische Zeitschrift に寄せたものである。Baron 氏は冒頭に於て問題を提起してゐる。即ち Dilthey, Meincke 等の研究の結果マキヤベリの國家及歴史に關する見解が Virtù, der Selbstbehauptungskraft u. Lebensfähigkeit des Menschen. (Dilthey) の觀念に基づてゐる事は一般に認められてなり、この Virtù の觀念は古代より傳はりフアニスムスに於てもネトラルカ以來存しマキヤベリに迄續いた事についても今日人々は承知してゐるが、かゝるフアニスムス的「人間の理解及分析」がマキヤベリ以前に國家及び歴史の觀察に於て、後にマキヤベリが進んで行つた道を豫め開いてゐたか否かについては今日尙充分明かにされてゐないとして以下この問題について論じてゐる。今こゝに内容の大意を紹介する。

すでにフアニスムスの初期に於てネトラルカは Virtù 及び in-

essia について明瞭に述べてゐる。彼は古代ローマの例を示し、ローマはカルタゴに完勝して以來餘りに安全な不安のない生活をなしたため自己の力を萎縮せしめたので「もしカルタゴが尙存してゐたなら Virtus Romana はなくならなかつたらう」〔Ep. fam.〕と述べ「一民族が隆盛の極に達すると Virtus を失ひそれに對して他の民族が新しき Virtus を持つて勃興し來るとし政治的 Virtus は民族より民族に移行すると考へたのである。又 Matteo Palmieri は “Della vita civile” なる書物に於て戰爭に際しての Virtù について論じてゐる。

しかればかゝる Virtù の隆退を自然作用及自然法則と關係せしめ、文化力政治力は必然的な終末なき民族より民族への推移をなすものなりとする考へは、中世的なる唯一永遠のローマ世界帝國の信念を持續して行けるだらうか。ネトラルカは諸民族がローマ世界帝國の支配より獨立する事を認め、ズンテの如く帝國に對する對抗を以て神意に叛くものとは考へなかつたが、しかし彼はローマ帝國の神性を認め黄金時代の再興を信じてゐた。たゞ彼は Christliche Roma Aeterna よりは Roma aeterna der Antike の復興をより多く望んでゐたが。吾人はこのネトラルカの永遠のローマ復興に對する信念とマキヤベリの民族及國家の歴史を自然の終末なき隆退とする觀念との間には、中世的ローマ信念と近世的歴史觀念を分つ所の間隙の存するのを見るのである。

この近世的歴史觀念への前提として Quattrocento のフアニ-

スムスに於て新な人生觀が現はれてゐる。即ち、それは人間のあらゆる精神力は精神生活の自然性、衝動、情熱に不可分に結合するものとし、Virtus と *earthly nature* の關係を考へ、*Freudento* のストア的合理主義が憤怒の情をば理性的思辨を曇らすものとしたのに反對したのである。一四〇二年には Pier Paolo Vergerio は青年心理の研究に於て青年期の「熱情と熱血」の中に青年のあらゆる特質が存すると述べ、Leonardo Bruni は「正當なる憤怒の沸騰なくしては如何にして敬神の念や勇氣が起り得るだらうか」と云ひ、パルミエリも戰士の勇氣の大部分は熱情的な憤怒の興奮によつて生ずるものと考へ、Lutiano も憤怒の情の價値を認めてゐる。要するに如何なる精神力及精神的偉大さも情熱を伴はずば出来ないといふ思想が十五世紀最初の十年間に於ける新しい收穫であつた。而してすでに十五世紀の初め

(一四〇三年頃) Francesco da Fiano がボンベッス、マリウス、ハンニバル等に現世の名譽を求める熱情がなければ彼等の勝利や成功はなかつたと述べて歴史に適用してゐる。當時フロレンス人は文藝學問政治經濟各方面に於て他より優ればならぬと考へ、文化の興隆衰退と文化荷擔者との關係を問題とした。プルニはそのダンテ・ペトラルカ傳(一四三六)の中でケケロの時代に *Respublica Romana* とローマ文學とが頂點に達したのは決して偶然ではなく、文藝學問はローマが國家狀態に應ずるもので、ローマ人の自由が皇帝支配の下に失はれると共に學問的活動も止り、その後衰微の時代を経てランゴバルド人を驅逐する

に及んでトスカナ始めイタリヤの自治都市は政治的自由を得、それと共に學藝も興りダンテ、ペトラルカ、ボツカチオ等輩出するに至つたと述べてゐる。更にプルニは政治的精神的自由がフロレンスのあらゆる偉大性の根源であるとしフロレンス市民には自己の向上發展に對する希望に於て恐るべき力が存するに信じ、パルミエリはもしも人々が傳統の羈絆を脱し勇氣を以て日々自由の中に歩を進め新しきを求めて行く意志に満たされてなれば文化の驚異時代が到來すると考へたのである。

既に觸れたる如くペトラルカはローマ帝國に於てその超歴史的使命を忘れる事は出来なかつた。たゞ彼はローマ帝國も永遠に隆盛を持續する事は出来ず衰退期を持つといふ點に於て歴史の一般的因果性に従ふものであるが、しかしそれはいつか又復活すべきものであつたのである。これに對しプルニはローマの帝國及文化の興隆衰退をば歴史荷擔者即ちローマ民族の *Virtus* によるものとし、ローマ民族及文化の純潔性の喪失即ちローマ史の終局なりと考へた。それ故中世獨逸の *Meisterum* や現在のローマ市民等はたとへ彼等古代ローマの名稱を繼承してゐる事あるにせよそれは新しきものであり異なるものなのである。即ち、イタリヤが再び興隆する場合にも、それは古代ローマ或は皇帝權の復活ではなく、イタリヤの諸自治都市がランゴバルド人を驅逐した後新なる政治的文化的生活を興したによると考へた。かくてこの *Rinnascita* に代るに歴史的個體としてのローマ民族を考へたのであり、プルニは更にローマが古

代世界に於ても他の民族・文化の間にあつて一個の歴史的個體として把握する點に迄進んでゐる。而してこの故に彼をば新しき歴史考察の開拓者とすゝ事が出来るのである。

以上の如き十五世紀フマニスムスの新しき歴史觀には歴史の *Naturlehre* が考へられてなり、その核心をなすものは *optimistische Psychologie* である。即ち、歴史及文化を創造する人間に於ては偉大を求むる名譽心、天賦の才能の自由伸展に對する熱情的憧憬の念が人間精神の原動力として働いてゐるとしたのである。

マキヤベリはかゝる歴史の自然論の繼承者であつた。プルニの "*Historia Florentini populi*" は彼がフロレンス史を著すに際して指導的役割をなしたのである。而して彼の歴史を絶えざる興隆衰退の循環なりとする根本觀念はすでにプルニに於ても見出し得るのである。更にマキヤベリは唯一の帝國を理想とするダンテに反對し多くの自主的國家の存立競争によりあらゆる力は完全に發揚されるとし國家の數が少なければ *Virtu* も消滅すると考へたのである。然しマキヤベリは十五世紀フマニスムスの思想を繼承してゐるが、この十五世紀フマニスムスの思想がマキヤベリの思想に迄發展するには尙一つの發展段階を経ねばならなかつたのである。それは十五世紀初期フマニスムスの樂觀主義に對する疑問であつて、*Neoplatonismus* と共に現はれランティノの "*Disputationes Cannadulenses*" によつて代表的表現を持つものである。即ち、ランティノは自然的情慾

は明徹な理性により制御せねばならぬとし、さもなければ人間は人間性を失ひ情熱の怪物に化してしまふと述べ情熱に對し理性を強調し、十五世紀フマニスムスの *Virtu* 發展に對する素朴樂觀說に反對したのである。

マキヤベリはかゝる段階を経てゐた。それ故彼自身も十五世紀初期の理想主義は人間に於ける惡なるものを考へざる人々の誤謬であるとフロレンス史序文に於けるプルニに對する批判中に述べてなり、而して積極的創造的 *Virtu* はたゞ少數の偉大なる國家建設者及國家指導者のみにあり、大衆即ち國民はたゞ國家及法律に依り作り出された *Wesensart* の下に制限された *Virtu* を持つに過ぎないと考へたのである。 *Hochehrsamkeit* の觀察によればたゞ偉大な個人のみが創造力を持つとしたのである。こゝに於てマキヤベリは十五世紀フマニスムスの歴史觀の一部のみを繼承する事が出来たのである。即ち十五世紀の歴史の *Naturlehre* を受繼いたが、然し人間の才能及本能の自由發展に對する樂觀的信賴は彼にはなかつたのである。 *Hochehrsamkeit* に於ては時間及歴史を超越する偉大なる個性に對し、時代・民族の差別なく永久的な自然法則に支配され又従つて個人により支配される大衆が存すると考へ自然科学的國家及歴史觀を成立せしめたのである。

以上は本論の大意である。即ち、バロン氏はマキヤベリに至るフマニスムスの歴史觀の發展、特に十五世紀以後の發展について論じたのであつて、フマニスムス研究者は勿論廣く歴史思

想の發展に關心を有する人々には一讀得る所多きを信するのである。

(Historische Zeitschrift Bd. 147, Heft 1, 1932) 【鑑見】

●日本地理學史

藤田元春

先きに日本民家史、尺度綜考を著して歴史地理研究に獨自の方面を開拓しつゝ、あつた著者は、三度その健筆を奮つて、本書を世に送り學界を驚嘆せしめた。本文八章、附録二篇、圖版約八十、菊版五百頁に達する大冊である。紹介の便宜の爲本文の目次を擧ぐれば、

第一章、日本に於ける郷土地理學の發達

第二章、朝鮮に現存せる日本地圖

第三章、海外で寫された行基圖

第四章、東洋に於ける地圖測繪の發達

第五章、新井白石と利瑪竇

第六章、郷土地理から世界地理へ

第七章、世界及日本國屏風

第八章、日本で出來た地球儀

(各章細目及附録省略)

各章は、嘗て著者が本誌並に地理教育其他に於て同じ題目によつて發表されたものであり、従つて元來獨立的のもので全卷を通讀せずとも讀者はその欲する一章を直ちに理解し得る長所があるが、著者が訂正加除以て統制ある一卷に纏めんとされた努力にも拘らず、尙諸所の重複と各章間に有機的統一を缺くの短

所を免がれてゐない。その内容は一見して明らかなる如く、主として日本地圖の發達を東洋及西洋との交渉過程に於て述べたもので正しくは日本地圖史論とも稱すべきもので、本來の地理學史的記載は第一章及第六章のみに止まり地圖史への序論をなす形である。

然しながら地圖が重要な地理學的資料の一つである事は勿論であつて、その意味に於て地圖を中心とせる日本地理學史と云ふ事ができる。先づ著者の地理學史的概観を見るに、我國に於ける地理學的業績は和銅の風土記言上を以て始る。その體裁文體、その編者等より考證するに、それが漢書地理志や郡國志等の支那地理學の濃厚なる影響によつて成された事を知り得る平安朝には延喜式、和名類聚抄の撰があり、室町時代に拾芥抄、新撰類聚往來、人國記等現はれたけれども、王朝政治の振はざる暗黒時代の事として學問は萎微して振はなかつたが徳川氏の江戸に幕府を開いて以來天下昌平再び地理學が復興するに至つた。近世に於けるその發達は主として高木利太氏に從つて概説し、世界地理に就いては天文十二年ホルトガルの人の渡來以後、ヨーロッパとの直接交渉開け御朱印船の活躍となり、鎖國後も幸ひ和蘭を通じて世界知識は漸次我國に浸潤して行つた。殊に新井白石の采覽異言、西洋紀聞の著あるに至つてより漸く蘭學の盛況を見多くの地理書地圖が翻譯される事となつた。以上古代と近世末に稍詳しい以外は地理書の書名、著者、内容等を列擧して、發達變遷の跡を簡単に述べられて居る。